潟語り(十)

文・小西一三
絵・小西由紀子

八郎潟の漁具作り その②

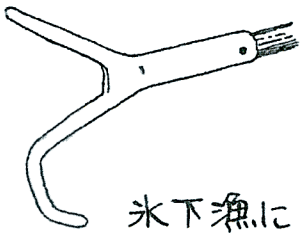
八郎潟の漁業が盛んだった頃、自性院前にあった鍛冶屋の親方として、さまざまな漁具を作っていた杉淵茂元さん(六六)。前回に続き、漁具作りについて語ってもらいました。

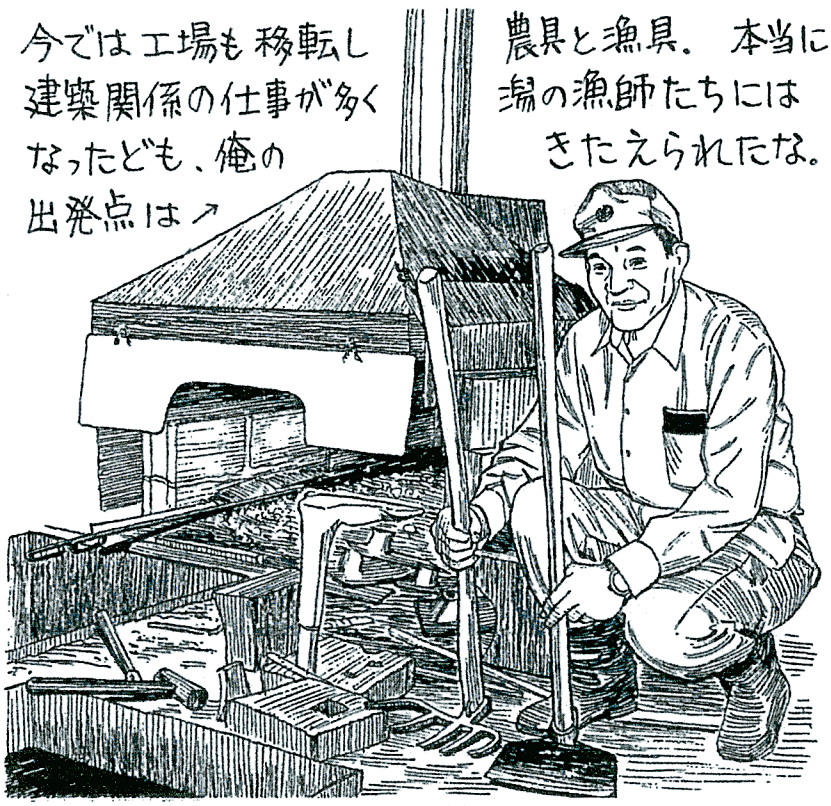
「これだばオソスケだ!!」

「オメのこしぇだモノはえぐ獲れる」って誉められるようになったのは、天王に作業場をかまえてから数年後。それまでは漁師達によくごしゃがれたものです。

今でも忘れられねのは初めてハヤスケ(※イラスト参照)を作った時のことだな。俺は主に五城目町の親方の元で作業していたから、山で使うトビグチなどはよく作っていた。ハヤスケもトビグチに似ているから俺にも簡単に作れると思っていたわけよ。ところが、これが失敗作品だった。

「こら鍛冶屋、くそ鍛冶。これ何だ!! これだばハヤスケでね、オソスケだ!!」って漁師にしったけごしゃがれた。氷の下で網をひっかける部分の長さや丸みが微妙に違っていて使いにくかったんだべな。だから作業が遅くなって、オソスケ。



このように漁で使う道具作りは、それぞれの漁師が師匠のようなもの。実際に使って、細かい部分の直しを言ってくる。それにしても潟の漁師は言葉が荒いっていうか、いつもケンカごし。俺も随分鍛えられたな…。

以前、シジミケンコが大量発生した時も大変だった。漁を止めていた人もあの時は再び出漁ということで、ケンコマンガの注文が殺到してな。今は忙しいからと言っても、「飯(まま)など食わねでこしぇれ!!」ってハッパかけられる始末。でも、今の俺があるのも漁師のおかげ。漁師には感謝してるよ。